「こころと健康」の出席点検及び電話連絡による不登校予防の取り組み

野本　ひさ[1)]，玉井　洋明[2)]，井戸　　興[2)]，上西　喜晴[2)]，川尻　美菜[2)]
安井　万理[2)]，萩森真由美[2)]，栗林　照子[2)]，岡本　厚美[2)]，田中　優子[2)]

1）愛媛大学　教育・学生支援機構
2）愛媛大学　教育センター事務課

School non-attendance prevention by contacting students who were absent from classes of “Physical, Mental, Emotional, and Social Health” subject

Hisa NOMOTO[1)], Hiroaki TAMAI[2)], Kou IDO, Kiharu UENISHI[2)]
Mina KAWAJIRI[2)], Mari YASUI[2)], Mayumi HAGINOMORI[2)]
Teruko KURIBAYASHI[2)], Atsumi OKAMOTO[2)], Yuko TANAKA[2)]

1）Institute for Education and Student Support, Ehime University
2）Center for Teacher Education Administration Office, Ehime University

1．はじめに

教育現場で不登校という言葉は目新しくなく，小中高では深刻な問題として取り上げられている。小中高の場合，年間30日以上学校に出てこられない場合，教育委員会を通してデータが把握され，平成20年度に不登校状態にあった小中学児童生徒は全体の2.89%，35人に１人である（文部科学省 2008）。大学の場合は授業に出てこないのが不登校かと言うとそうではない。昔から授業には出てこなくても試験の時だけ登校しきちんと単位をとって卒業していく学生がいた。彼らは授業に出てこない代わりにサークル活動に熱中していたり，アルバイトでお金を貯めて何か成長につながる体験をしたりと学業以外の活動による不登校であった。しかし今の不登校学生の中には，一日中家の中にこもりっきりになるいわゆるひきこもり型の不登校がたくさんいる（高塚 2002）。大学生の不登校に関する報告はその実態を掌握することが困難なために非常に少なく，近年の学生支援 GP の報告書などの中に散在している現状である（大分大学 2010，富山大学 2010）。例えば大分大学では休退学理由と不登校傾向を関連付けて推察し，全学生の２%強の不登校者数を算出して報告している（大分大学 2010）。香川大学にも同様のデータがあり，少なく見積もって１%の学生が不登校であると報告されている（文部科学省 1999）が，いずれも本当の実態をつかんでいるかどうかわからない。周知のように大学の出席管理は科目ごとに行われているため，どの学生が不登校状態になっているのか早期に発見することが難しい。またこれまでは学生の自主性，自立性を尊重するあまり手を貸さなければならない場面を見逃してしまうこともあった。しかし手を貸さないことが自立を促すことに必ずしもつながらないことに我々は薄々気づきつつある。

このような背景のもと，学生支援センターでは出席状況，単位取得状況，履修登録を学期ごとにスクリーニングし，不登校学生を早期に発見する取り組みを行っている。このうち全学生必修の初年次科目「こころと健康」では，欠席の続く学生に電話連絡を行い新入生の不登校予防を試みている。本報では「こころと健康」の出席状況を分析し，初年次科目への出席と学生の修学状況の関連を見出したので報告する。

2．科目の位置づけと出席管理

「こころと健康」は共通教育初年次科目として位置づけられ，全新入生に対する必修科目（15コマ２単位）として

開講されている。前学期13クラス（火曜２限，火曜７限，水曜１限），後学期４クラス（金曜２限）開講しており，ユニット方式で担当教員が入れ替わるため共通教育チームが出席点検を行っている。本科目は大学への適応を支援するための科目設計をしており，その趣旨から不登校予防のために欠席の続く学生には電話連絡を行い出席を促している。具体的には３回欠席が累積した時点で不登校兆候と考え４回目の授業の前後にその学生に共通教育チームから電話連絡を行い，欠席の理由を聞いたり出席を促したりする。この電話連絡の様子は「電話連絡簿」として随時学生支援センターに提出され，電話の様子から直ちに支援が必要だと判断される学生には学生支援センターがサポートを行うという連携体制を敷いている。

３．21年度から23年度の出席状況と成績

平成21年度から23年度の出席状況の一覧を表１に示す。なお以後の報告は特に新入時の特徴を強調するために，前学期開講13クラスのデータにより行う。

一度も欠席しなかった者は21年度65.2％，22年度62.1％，23年度61.6％で６割以上の学生が休まず真面目に出席している。一方電話連絡の対象となる４回以上欠席した者は21年度41名，22年度58名，23年度51名と例年３～４％の学生が新入時期から不登校の兆しを見せる。さらに６回以上欠席し評価の対象にならない者も例年10名以上いる現状である。

出席状況と成績の関連を表２に示す。「こころと健康」科目全体の成績は良好でどの年度も６～７割が80点以上の評価を得ており，科目に合格しない者（不可及び評価しない）は50名以下である。しかし欠席が続き電話連絡した者の成績は芳しくなく，６回以上欠席し「評価しない」者は当然単位取得ができないが，評価可能な者でも４，５回欠席した者には秀は皆無で優の者もわずかである。さらに得点が足らず不可になる者も毎年10名前後存在し，不登校兆候が成績にマイナスに反映していることが明らかである。

４．不登校学生の実態

それでは初年次科目「こころと健康」で不登校兆候を示す学生はどのような学生なのであろうか。その実態を測るために，21年度から23年度の各年度に６回以上欠席して「評価しない」となった者のその後の経緯を表３－１から３－３に示す。

21年度「評価しない」11名（現在３回生）のうち，現在休退学・除籍者３名，60単位以上取得できている者５名，残り３名は14単位，17単位，44単位と著しく取得単位が少ない。22年度「評価しない」20名（現在２回生）うち，現在休退学・除籍者５名，30単位以上取得できている者４名，残り11名のうち０単位２名，３－５単位２名，11－25単位７名である。また在学者15名のうち14名が「評価しない」科目が２ケタ（12科目から39科目）になっている。学生支援センターで相談に応じた者が３名おり，いずれも１年後学期以降に本人に連絡が取れないため履修指導が難しいと学担教員からサポートを依頼されたケースである。23年度新入生「評価しない」15名のうち現在休退学・除籍者が１名おり，残り14名のうち10単位以上取得できている者は１名のみで13名は０単位から８単位と単位取得が著しく少ない。また「評価しない」科目数も多く，入学直後であ

表１　こころと健康科目出席状況（前期13クラス）

欠席回数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	総数
21年度人数(％)	989(65.2)	282(18.5)	142(9.4)	63(4.2)	22(1.5)	8(0.5)	1(0.1)	0(0.0)	4(0.3)	1(0.1)	1(0.1)	1(0.1)	1(0.1)	0(0.0)	2(0.1)	0(0.0)	1,516
電話連絡人数					41(2.7)												
22年度人数(％)	931(62.1)	279(18.6)	157(10.5)	75(5.0)	27(1.8)	11(0.7)	3(0.2)	3(0.2)	2(0.1)	2(0.2)	1(0.1)	0(0.0)	4(0.3)	2(0.1)	1(0.1)	2(0.1)	1,500
電話連絡人数					58(3.9)												
23年度人数(％)	992(61.6)	324(20.1)	182(11.3)	61(3.8)	27(1.7)	9(0.5)	6(0.3)	2(0.1)	3(0.2)	0(0.0)	1(0.1)	0(0.0)	2(0.1)	2(0.1)	0(0.0)	0(0.0)	1,610
電話連絡人数					52(3.2)												

※電話連絡は厳密には３回目か４回目に行っていたが，便宜上４回目以降を集計した。

表２　こころと健康科目（前期開講クラス）の評定人数

	秀	優	良	可	不可	評価しない	
21年度評定人数(％)	300(20.0)	822(54.2)	269(17.7)	81(5.3)	33(2.1)	11(0.7)	1,516
うち電話連絡者人数(％)	0(0.0)	2(4.9)	11(22.4)	7(25.0)	10(24.4)	11(22.4)	41
22年度評定人数(％)	155(10.3)	816(54.4)	381(25.4)	105(7.0)	23(1.5)	20(1.3)	1,500
うち電話連絡者人数(％)	0(0.0)	0(0.0)	9(15.5)	20(34.5)	9(15.5)	20(34.5)	58
23年度評定人数(％)	172(10.7)	957(59.4)	347(21.6)	92(5.7)	27(1.7)	15(0.9)	1,610
うち電話連絡者人数(％)	0(0.0)	2(3.9)	11(21.1)	13(25.0)	11(21.6)	15(29.4)	52

表３－１　21年度「評価しない」者11名の23年度９月現在状況

ID	現　　状
1	10年２月除籍
2	９年９月退学
3	現在44単位
4	現在73単位
5	現在62単位
6	現在17単位
7	現在63単位
8	現在136単位
9	現在77単位
10	11年３月退学
11	現在14単位

表３－２　22年度「評価しない」者20名の23年度９月現在状況

ID	23年度前学期までに取得した単位数	評価しない科目数	備　　考
1	42	13	
2	18	17	
3	11	15	
4	16	20	
5	49	6	
6	42	12	
7	5	29	相談あり
8	11年３月退学(他大学入学)		
9	0		休学中
10	0	24	
11	0	23	
12	3	39	相談あり
13	21	28	相談あり
14	30	20	
15	0		休学中
16	11年３月退学(他大学入学)		
17	20	26	
18	15	21	
19	25	15	
20	0	15	休学中

りながら６科目から12科目も出席をしていない科目がある。学生支援センターで相談に応じた者は３名おり，全員が教職員から相談がありサポートを始めた者である。

さらにどの段階から不登校兆候を示しているかをみるために，23年度「評価しない」15名は電話連絡の日付を調べた。その結果，５月中に連続欠席になり始めた者が５名，６月中６名，７月中２名，連絡ができなかった者２名であり，新学期が始まって早々に不登校兆候を示していることが判明した。また自宅から通学している者が４名おり，一人暮らしになって生活管理が不十分になってしまうことだけが不登校の理由ではないことも判明した。

表３－３　23年度「評価しない」者15名の23年度９月現在状況

ID	23年度前学期までに取得した単位数	評価しない科目数	備考	連絡日	住居
1	2	11		５月18日	下宿
2	2	11	相談あり	５月23日	自宅
3	0	11	相談あり	５月24日	自宅
4	4	11		５月31日	下宿
5	0	12		６月１日	下宿
6	0	13	休学中		下宿
7	4	12		６月21日	自宅
8	4	9	相談あり	６月14日	下宿
9	4	7		６月14日	下宿
10	8	6		５月18日	下宿
11	0	9			自宅
12	4	9		７月５日	下宿
13	12	3		６月15日	下宿
14	6	7		７月13日	下宿
15	6	10		６月15日	下宿

５．電話連絡の状況

23年度の電話連絡簿から欠席した理由を抜粋する。電話連絡簿には電話時に聞いた欠席の理由が記入されているが，欠席の理由で最も多いのは「寝坊」である。ところが「評価しない」となった15名の理由には「寝坊」はほとんどなく，「体調不良」かあるいは無記入（電話には出ず，留守電かメール連絡により返信がないもの）が大半を占めていた。

６．全体の考察と今後の支援策

６－１．「こころと健康」の出席状況にみる新入生像

新入学生の大学生活への適応を促すことを目的にした初年次科目「こころと健康」の出席状況と成績より，新入生は概ね真面目に授業に出席し，良い成績を修めていることがわかる。また何らかの理由により授業を休んでしまった学生が例年約500名程度いるが，そのほとんどが１～３回の欠席であり，高校までのように厳しく出席管理をされなくても自立した生活ができるようになっている様子がうかがえる。一方連続欠席が懸念される４回以上欠席者が例年50名程度存在するが，その半数以上は不登校に陥ることなく出席することができている。「こころと健康」では不登校を予防するために連続欠席者への電話連絡を行っているが，連絡を受けた学生は「ちょっと寝坊してしまいました。次からは頑張って行きます。」などと素直に反省することが多いようである。また６回以上欠席すると単位が出なくなることを知らない学生もおり電話連絡により慌てて生活

を整えなおすケースも見受けられ，入学直後で大学生活に慣れていない学生がうっかり不登校状態に陥ってしまわないよう丁寧なサポートを続けていきたい。

しかしながら電話連絡の対象となる４回以上欠席者の成績は芳しくなく，単位が取れても良か可がほとんどで，不可になる者も例年10名程度存在する。「こころと健康」の成績評価は授業中の提出物などの累積点により算出されるため欠席回数が多くなれば必然的に評点は下がるが，５回休んでもせいぜい30点程度のマイナスであり単位が取れる可能性は十分にある。このことから連続欠席者は学習意欲も低下していることが推察され，休まないためのサポートと同時に学習上のサポートも必要であることが判明した。さらに電話連絡をしても復活できず「評価しない」となってしまう学生も例年１％程度存在し，早期に不登校状態となる学生の問題性を示している。

６－２．不登校学生の発見

「こころと健康」に出席できない学生を追跡してみると，彼らは著しい不登校の兆候を示していることがわかる。23年度入学生の状況ではほとんどの者が前学期に取得できた単位数が著しく少なく，また「評価しない」科目の数も多い。このことは彼らは「こころと健康」以外も出席していない，即ち入学時から不登校状態にあることを示している。また不登校になり始めるのは５月，６月の早い時期からであり，このような学生には早期の介入が必要である。22年度入学生の現状からも深刻さはうかがえ，「評価しない」20名のうち11名は２回生になってもほぼ不登校の状態が続いている。しかしながら３回生になると少し状況が変わってくるようで，21年度「評価しない」学生11名のうち現在も不登校状態がうかがえる者は２名のみで，多くの者は単位取得ができつつあるようである。

６－３．大学生の不登校支援

前述したことから「こころと健康」に出席できない学生は不登校状態に陥る可能性が高いため，本科目に連続欠席する学生には早目に個別の支援を行わなければならないことが明らかとなった。学生支援センターでは現在も「こころと健康」に連続欠席している学生については他の科目の出席状況も可能な限り観察し，不登校状態であることが推察されれば単位の出る学期末を待たずに早目に学担にお知らせしたりセンターで面談を引き受けたりしているが，さらに具体的なサポートの方法を明確にしていくことが今後の課題である。そのためには不登校に陥る学生に丁寧に関わり不登校状態にある学生の実態に迫るとともに，何を手がかりにすれば不登校状態を脱することができるのかを探し出すことが重要である。今回の分析によりひとつの明るい手がかりとして，３回生になるとどうやら復活して単位取得ができるようになる様子が分析により明らかになった。この復活のプロセスを参考に，今後は彼らにいつ，どのタイミングでどんなサポートを行えばよいのかを具体的に明らかにしたい。大学生の不登校の問題は大学のユニバーサル化をはじめ若者のメンタルヘルス（内田 2009）や家族とのつながり（高塚 2002），あるいはひきこもり（斉藤環 2002）やニート（厚生労働省 2007）など諸々の社会現象との関係で推察すると，今後増えることはあっても減ることはないと思われる。これまでの大学は学生を大人として扱うべきだという価値観でもって「大学らしさ」を呈してきたが，大切に育てられた孤独な新入生たちには学生の自覚を喚起する程度の取り組みだけではもはやひとりで成長して大人になってくれはしないのである。不登校の兆候を早期に発見し，適切な時期と方法により対処すること，このことがこれからの学生支援の大きな課題である。

引用文献

厚生労働省（2007）「ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究発表資料」
文部科学省（1999）「大学における学生生活の充実に関する調査研究会議事（平成12年度）」
文部科学省（2008）「平成21年度学校基本調査（平成21年度）」
大分大学（2010）「不登校傾向の学生へのアウトリーチ型支援」，平成20年度文部科学省新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム報告書
斉藤環（2002）「ひきこもり救出マニュアル」PHP 研究所
高塚雄介（2002）「ひきこもる心理とじこもる理由～自立社会の落とし穴」，学陽書房
富山大学（2010）「「オフ」と「オン」の調和による学生支援」，平成19年度文部科学省新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム報告書
内田千代子（2009）「大学における休・退学・留年学生に関する調査第29報」，第30回全国メンタルヘルス研究会報告書